

【Character Episode : Shiro】

生まれて来てすぐに、彼女は特別な存在なのだと誰もが考えた。そうしてそれは、彼女がほんの少しだけ成長した頃に現実のものとなった。

「神様からの神託を受けるだなんて...すごいわ、シロ！」

そう言って、彼女—シロの母親は強くシロを抱き締める。

まだ、立って歩けるようになって間もないシロには母親が何を言っているのか全く分からなかったが、そんな彼女でも母親がとても喜んでくれている事だけは何となく分かった。

それからしばらくして、魔法の練習をしても良いほどの年齢になったシロは一先ずなにか出してみたいと幼い子どもに渡される玩具のような杖を懸命に振るい、そうして光の魔法を放ってみせた。

「光の魔法を.....やっぱりシロは、神様に選ばれた子なんだな！」

間近で魔法の練習を見守っていた父親は、彼女が偶然にも放った魔法を見て嬉しそうに駆け寄って彼女を撫で回し、頬擦りし始めた。

僅かばかりジョリジョリとした髭の感触も心地好くて、シロは父親に頬を押し付け返すのだった。

それからしばらくして、シロは教会で魔法の修行を積むことになった。

光の魔法は、扱う者が特に珍しい魔法で一般の魔法使いや魔法学校で学ぶには余りにも敷居が高い。古い知識や記録の残る教会で、シスターや聖職者達の手解きを受けながら学んだ方が良さだろうと周囲の者達が考えた結果だった。

シロも両親の元を離れるのは寂しかったけれど、二人が自分の事を思ってそうしてくれているのだと分かっていたから、受け入れた。

そうして、街の大きな教会の一角。今日から自分が暮らす事になる部屋に案内されたシロの元に、一人の優しいシスターがやって来た。彼女は微笑みながらシロの前まで歩いてくると、視線を合わせる為に腰を下ろした。

「ようこそ。お父様やお母様から離れて寂しいかもしれないけど、出来るだけそう感じないように今日から私があなたのお世話をすることになったの。よろしくね、シロちゃん」

そうしてシロの頭の上に手が置かれ、その手がゆっくりと動いて彼女の頭を撫でた。その感覚が心地好くて、シロは思わず目を細めた。

それからは魔法の修行や様々な事を勉強しながらシスターや聖職者、偶に教会へお祈りに来る人達と触れ合う日々が続いた。

光の魔法は制御が難しく最初の頃は随分と苦戦したが、才能のあったシロは少しずつ...しかし確実にその力を使いこなせるようになっていった。その度に周りの人達が喜んでくれたり、頭を撫でてくれた。

その感覚が、シロはとても好きだった。

そんな日々がずっと続くと思っていた頃。

空が厚く暗い雲に覆われ、赤い月が顔を覗かせるようになった頃。

教会で過ごす聖職者達は慌ただしくしていた。どうやら、悪魔が現れてアチコチで人々や猫達を襲っているのだという。

そんな風に話している人々の声が耳に届いた時、ずっと小さかった頃の事を思い出す。

自分の母親が、「神託」を受けた自分の事を見てとても喜んでいた日の事を。

『シロ。あなたが大きくなったら、困っているたくさんの人たちを助けるために旅に出ることになるでしょ

う。その旅であなたはきっと、たくさんの人たちを助けることができます』
あなたにはその力がある、だから—たくさんの人たちを助けてあげてくださいね。
とても優しく、温かい声にそう告げられた事を思い出す。
きっと今がその時なのだとシロは感じた。

困っている人達が、たくさんいる。
自分の力なら、助けられる。

なによりも、人の喜ぶ顔を見るのが好きだから。

こうして、シロは旅立ちを決意する。
旅立つ事を告げた時、世話係のシスターは少し驚いた様な顔を見せたが、すぐに微笑んで彼女の頭を撫でた。
「いい？ シロ。貴女の力で、たくさんの人たちを助けてあげてね」
大きく頷いた彼女は、旅支度を済ませて教会を後にした。困っている人達を、助けて回るために。

「コラ、シロ！ そっちには罨があるってコロが言ってたじゃん！」
「あ、そうでした！ じゃあこっちですか？」
「そっちはさっき私が罨踏んだじゃん！」
「.....自信満々に言うことじゃないだろ？」
ダンジョンと化した遺跡の一角で、シロは旅先で出会った仲間達と仕掛けを突破しようと頭を抱えていた。
村人によると、この遺跡の付近で道に迷った旅商人がいるかもしれないのだという。
放っておけないと、旅のリーダーであるユリが提案して探しに来たのだがご覧の通り、仕掛けに四苦八苦している状態である。
「ああもう！ コレじゃ迷子の旅商人を見つける前に、私達がここから出られなくなっちゃうわよ！」
ムキー！という擬音が聞こえてきそうな表情で、仲間の一人のアカネは地団駄を踏んだ。それを呆れたような冷めたような目で見つめるもう一人の仲間、大魔法使いのコロは冷静に周囲を観察しながらも手掛かりを得られずにいる様子だった。
「困りましたね...」

顎に手を当てながら、ユリはそう呟いた。試行錯誤を繰り返しながら罨の突破を試みてはいるが、生憎このパーティーには罨の解除に長けた人手も、そうした魔法が得意な魔法使いもいない。...仮にそうした魔法が得意な者がいたとしても、これだけ罨だらけだといちいち解除しては魔力の消費もバカにならない。彼女達だけでは、この遺跡を調べるのはかなり厳しいというのが現状だった。

「ぬううう...腹立ってきた！」
さてどうしたものか...皆がそう思案していると、突然アカネが痙攣を起こしたように叫んだ。そうして何を思ったか、次の瞬間横にあった壁を全力で殴り付けたのだ。大きな音と共に壁が揺れる。アカネの方も、衝撃が遅れてやって来たのか痛そうな表情のまま固まって動かない。

—その時だった。

「アカネさん！」

咄嗟にシロは反射的にアカネの方へと手を伸ばす。それと同時に、杖に魔力を込めて呪文を詠唱し始めた。アカネの手を掴むのと同時に、壁が崩壊する。そして、そこからまるで獲物が弱るのを待ち構えていたと言わんばかりに、巨大な骸骨の姿をした悪魔が飛び出して来た。

「うわああああっ！？ 出たああああっっ！！！」

目の前に迫る骸骨の腕に掴まれそうになり、アカネは絶叫を上げる。だが、その悪魔がアカネに触れることはなかった。

先程シロの詠唱していた魔法が発動する。無数の光が降り注ぎ、悪魔を貫いて浄化したのだ。

悪魔が霧散すると同時に、部屋の何処からかカチャリ...と音が響く。そして、部屋のアチコチに設置されていた罠が解除されるのが確認出来た。どうやら、先程の悪魔の魔法で延々と罠が設置され続けていたらしい。

「よくやったな、シロ」

「お手柄ですね！ シロさん！」

「ありがとうシロ〜！！！」

褒めたり喜んだり、飛びついて頬擦りしてくる皆に囲まれて、シロはえへへ...と頬を緩めた。

こうして喜んでもらえるのなら、もっともっと頑張ろう—そんな風に思いながら、寄せられた頬に自分の頬を少しだけ擦り返した。